



室宮山古墳の後円部には墳丘中軸を挟んで2つの竪穴式石室が構築されています。うち昭和25年に南石室が盗掘され、緊急に発掘調査が実施されました。竪穴式石室の内部には豪壮な長持形石棺が納められていたことはあまりにも著名ですが、その石室の上部が40体前後にも及ぶ武器形埴輪群により方形に取り囲まれていたことも、古墳時代中期の標識例

ふるさと御所

文化財探訪

其の二十六

古墳時代〈14〉

葛城氏の盛衰

室宮山古墳の
親衛隊

(3)

生涯学習課 文化財係

☎内線696

として度々取り上げられるものです。これら高さ15m近い大形の武器形埴輪は、身体に着用する鉄製甲冑、矢の束を背負って携行するための靴禦するための革製盾をそれぞれ写したもので、図1のような配列となっています。いずれもその正面を主体部の外側に向けて立て並べられており、それは聖域に侵入しようとする者を威圧する、まさに結界としての意識の下で立て並べられたものに相違ありません。

ではこれらの武器形埴輪は、誰の武装をモデルにして作られたのでしょうか。南石室に葬られた人物の武装、と考えるのが常識的かも知れませんが、その場合、次のような疑問が生じます。実は図1の南側の埴輪列の緑色で示した盾形埴輪のうち、中央に赤点を付したものは、盾形埴輪の上に冑形埴輪を乗せる、いわば「盾持ち人」(写真2)を表現したものであることが判明しました。

この冑形埴輪なのですが、当時一般的であった鉄製冑ではなく、革製冑を表現していることに注目されます。実際に南石室から出土したのも鉄製冑でしたから、埴輪の革製冑は誰の武装を写したもので

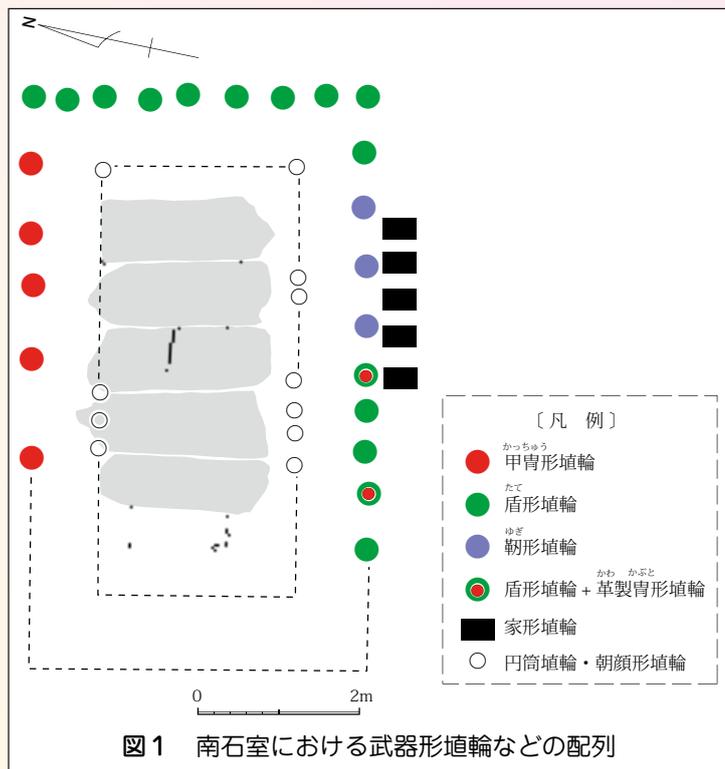


図1 南石室における武器形埴輪などの配列

のかが問題となります。そこで南石室の被葬者の立場に立つて、これら武器形埴輪が自分の周囲を取り囲むという状況を考えるならば、40体にもなりなんとするその武器形埴輪群は、彼の死後の世界を警衛するべく立て並べられた、集団的軍備の象徴とみることが出来ます。そして彼の生前にそのモデルとなつたものを求めるならば、生前の「王」たる彼の身辺警護の役を担った親衛隊の武装状態であったと考えられます。また、室宮山古墳では前方部北張出部の粘土槨で革製冑が出土しており、その被葬者こそが親衛隊長であつたとみられます。



写真2 盾持ち人(革製冑形埴輪と盾形埴輪)
〔掲載許可〕奈良県立考古学研究所附属博物館

先月号で扱った野中古墳においても、革製冑と共に襟付短甲という特殊な甲は他と区別して扱われていました。革製冑と襟付短甲は、親衛隊や政権直属の各種施設を警護する衛兵のための武装として特別に定められたものでした。

参考文献

拙著 『古墳時代の王権と軍事』、2006年、学生社

(文責 藤田和尊)

